

2009年3月6日

21世紀のエネルギー・セキュリティと沖縄
- 激動する時代と求められる人づくり -

講師: 武田 修三郎 氏¹

今日の話は、3つあります。一つは、エネルギー安全保障です。現下の状況はアメリカは世界最大のエネルギー消費国、最大の炭酸ガス排出国で、中国もこれに次いでいます。後者では今年あたり中国が抜き、両国で世界の44%になります。この二カ国は京都議定書の枠外にあり、ポスト京都の体制を決めるコップ15が今年の暮れにデンマークで開かれるが日本はどう対処してゆけば良いのか、米国となのか、それともEUとなのか、また中国やインドといった途上国とはどう対処すればよいか、決めかねています。これらは全て広い意味での日本のエネルギー安全保障となります。本日のこの点での結論は、アメリカは変わった、になります。これまで経済に影響があると環境対策を二の次にしていたのだが、彼らの経済回復の要因として位置づけました。また、今まであり得なかった気候変動やエネルギーで米中の話しもはじまりそうです。

二つ目は、現下の米国、あるいは世界の現状で、ここでも大きな変化がおきています。米国の金融問題に端を発した経済問題は今後どうなるのか、21世紀の世界恐慌なののでしょうか。日欧の経済の疲弊度も激しい。いったい、世界は壊滅し始めたのかについての関心もあります。これは世界の安

全保障上の問題にもつながります。米国の力が相対的に低下するなかで、新たな心配の種が至る所にまかれています。イランは人工衛星を打ち上げ核武装への道を着々と進んでいるし、アメリカ軍が撤退した後のイラクはどうなるかは予測が付きません。アフガン、パキスタンの情勢はさらに不安定。中国は、毎年二桁軍事増強を重ね、原子力空母を建設しています。一方、北朝鮮は国家滅亡のなかでテポドンを打ち上げと世界にチキンレースを再びしかけています。民主党の小沢代表が、極東における米国のプレゼンスは第7艦隊で十分だと発言したが、まったくこれらの変化を認識できていないといえるでしょう。

その上、この変化で日本にとり別な心配の種もでた。それはアメリカに民主党のオバマ大統領が誕生したことにあります。多くの日本人には先のクリントン政権時に、日本はバイパスされたという苦い思い出があります。また、民主党政権が沖縄への基地問題とどうリンクするのもあります。これについては、オバマが任命したクリントン国務長官は上院公聴会で「外交政策は理念と現実の結合であって、硬直化したイデオロギーに基づくものであってはならない」としたが、基地問題の解決は理念と現実の結合がどのようなものになるか、今後の課題もあります。

三つ目は、もっとも話したいフロニーモスになります。フロニーモスという言葉はこちらで使うのは初めてですが、決して私の造語ではなく、ギリシアの哲人アリストテレスが使った言葉で、イノベーションをもたらす人という意味です。この言葉を百年余り、誰も使う人がいなかったのだが、

¹ 日本産学フォーラム事務局長、早稲田大学総長室参与、武田アンド・アソシエイツ代表

私は歴史の変わり目だけに、この言葉と概念を再び定着させることが大事だと信じ、その思いで「フロニーモスたち」の題名で本をだしました。この本は決して硬い本ではありません。硬いと思われる方はパラダイムとか思考とか教育といったことに慣れてないだけで、少し我慢して読んでいただければわかります。京都大学の松本総長は、もう一冊献本しろとおっしゃる。理由は、面白く風呂場で二度読み、ふやけてぼろぼろになった、と。ただ、これについては本日はさわりになります。私は、フロニーモスの話をする時には、この本を読んでくれた人に限定しています。皆さんがお読み頂いた後、より本格的に話しをさせて頂こうと思っています。

本日は何点かの資料を用意させて頂いています。

一点は、昨日でた雑誌「環境会議」の春季号の記事で内容はストークスとの対談。ストークスは日経などに良く掲載されているだけに、日本での知名度はあるが、アメリカを代表するジャーナリストで、民主党の気候変動、経済、貿易でのブレーンといえます。彼が外務省の招待者として、昨年12月日本に二週間ほど滞在した時のものです。2点目は、オバマ新政権に対しての資料で言わばフーズフーズです。第3番目は、ベーカー前駐日大使や外務省の谷内顧問や私がやっている日米戦略研究所のメモでサンプルです。第4番目は昨日早稲田で行った日米研究所の立ち上げでのプログラムと寄付集めの案内で、この経緯については既に話した記憶がありますが、日米全体の政策を考える若い人を養成するため、五大学の学長・総長、早稲田の白井、東大の小宮

山、慶応の安西、京都の松本、立命館の長田先生が中心となってつくりました。この種の研究所はこれまでにあるようで存在しなかったが6月にはワシントンで事務所を開きます。第5番目は話題のシティがだした、2009年の企業財務課題の見直しで、シティはサブプライムの荒波を受け苦境に立っているが彼らの分析力はすばらしく、参考にしてもらえばと思っています。

オバマと気候変動とエネルギー

順は先の通りで、現下のアメリカの気候変動とエネルギーはブッシュ時代から一変した、といえます。これは共和党、民主党の政策上の違いということではなく、共和党のマケインでもエネルギーでは違いはあったが気候変動ではほぼ同じで、要はリーダーのスタイルのチェンジにありました。後で触れるが、ブッシュは国民のこれらでの動きにたいしてKY、空気を読めなかったのですが、オバマやマケインはそうでなかった。オバマの政治スタイルはネット政治で選挙中にはブラックベリー、といって本物の「クロイチゴ」ではなくカナダに本社があるネットシステムのことですが世界最大のもので、を使いネットで100ドルづつ選挙資金を集めました。ブラックベリー政治というかネット政治で、当選後もブラックベリーを手元から離さない。ホワイトハウスのSPがセキュリティ上のことからこれを取上げようとしても、頑として言うことをきかなく、ついにはSPも諦め、これを使うのを黙認しています。

気候変動に関しては、ブッシュ政権は政府の動きと国民や研究者とが離反していたが、オバマは、国民との対話でこれを推進

するとした。ブッシュがリーダーの役割は決定することとリーダーを国民の一段上においたが、オバマは国民と同じ目線にたち、フォロワーと対話を重ね、推進を決めました。

ブッシュの政策とは 180 度の転換がおきました。先に話したとおり、ブッシュがこれらを米経済の発展にマイナスだとしたが、彼はプラス、新たな産業の創生をもたらすとなりました。また、国際的な枠組みを大事にするために京都会議の時の米の気候変動担当特使であったトッド・スターンを再び登用しました。彼がアメリカの顔になります。

一方、国内用の顔もあります。ここでは一人ではなく、大統領の科学補佐官、つまり OSTP のディレクターのジョン・ホールデン、エネルギー省の長官のステーブ・チュー、二人とも著名な科学者でチューはノーベル物理学賞を受賞しています。しかし、チューは学者だけでなく、その後パークレーの研究所所長に就任しましたが、そのときにも民間から 500 億円の金を集め新エネ開発をおこなう能力を有しています。また、これには環境庁も関係し長官はリサ・ジャクソン、ノアと呼ばれている、大洋大気圏庁のジェーン・ルブチェンコ長官も関係しています。また、ホワイトハウスにもこれらを担当する部門ができました。エネルギー・気候変動問題担当補佐官キャロル・ブラウナーになります。また、ここではサマーズの国家経済会議も関与します。国家経済会議は経済に関与するだけでなく WTO そして、気候変動など前面に渡って関与しますが、ここでの主要人物は国際担当次長のダイアナ・ファウエルになります。

彼女は、二つ重要なレポートを出していません。一つのレポートでは、省エネが、もっとも大きなエネルギー源としました。石油の増産、新エネ全てをあわせた二倍以上になる、と。なお、もう一つは中国のエネルギー政策についてのもので、これは、今後の米中関係の進展を予測させる報告といえます。

船頭が多いようですが、中心人物がおり、それはホワイトハウスの気候変動・エネルギー担当の補佐官のキャロル・ブラウナーになります。彼女は 8 年前のクリントン政権時の環境省長官。歴代の環境庁長官の中でもっとも実績を上げたといわれています。このため、米産業界の中には彼女は厳格すぎるのではないかの心配もあるが、この点、私は、一切心配していません。彼女のバックグラウンドが化学で、エネルギーは知らないでこれを与えれば、良い。その能力はある、と。現在、日本の専門家と接点作りをおこなっており、これが本当に成功するかどうかは次回、報告するつもりです。

先に、オバマのもとで変化するとしたが、誤解のないようにつけ加えると、これは一日にして変化できるというわけではありません。たとえば、米議会にも、未だいろんな意見があり、産業発展への障害と見るものもいれば一方で EU のスタンダードより厳しい規制を導入しようとするケリー議員などもいます。ただ、議会も国民もオバマが二期 8 年間やれば変わります。彼の出現はアメリカ人のマインドに変化をもたらす、と私は思っています。

(3 ページのみ抜粋)